

かがやき



第5号 平成30年3月発行

可能性が開く場所

～狛江市の特別支援教室～



子どもの可能性を信じる

「てるくんのお母さん」

「てるくんのことを少し教えてください。てるくんは今年小学校5年生で、週に2回、小学校の特別支援教室に通っています。」

「てるくんは、どのようなことを苦手にしていましたか。」

「てるくんは人と話すことが好きなのですが、自分の中で考えをまとめて話すことが苦手です。あと、そのときに話しているタイミングがどうか見極めずに話し始めてしまったり、話の仕方もいきなり結論を言ったり、さわりの部分だけを繰り返したり、なかなか要点を得ないことがあります。でもたまに良いことも言っていますね。」

「てるくんが特別支援教室に通い始めたきっかけは、それが幼稚園のときに、先生から療育を勧められたのですが、そのときは療育の施設が一杯ですぐに入れなくて、半年待ってから、半年間通ったのですけど、そのときに半年通うだけでは変わらないだろうなって思ったんです。それで、小学校に入學する前はもうどうしたらいいのか分からないような状況だったんですが、市役所に就学相談に行ったときに「特別支援教室があるから大丈夫。みんなびっくりするくらい変わるから」と言ってもらって。その言葉が私の中にスッと入ってきて、あ、そういうものなんだ、それじゃあもう通わせよう。という感じで、そのまま1年生から特別支援教室に通うことになりました。」

「当時、特別支援教室にはどのようなイメージがありましたか。」

「当時は子育てのそういう情報ってあまりなかったんです。しかも、てるくんは他の市の幼稚園に通っていたので、周りから聞けることもなくて。そんな中で小学校に入學したんですけど、でも入學したら当時の特別支援の保護者の皆さんが、特別支援教室を説明する冊子をつくられていてそれを読んで、また私の中でストンと落ちるものがあった。私たちの場合は、初めは情報は少なかつたんですけど、少しずつ周りからの情報で納得させていただいた感じでした。」

「実際に入學してからはどのような感じでしたか。」



そのお母さんに「大丈夫。きっと変わりますから」って伝えました。

と出て行ってしまったこともありましたね。」

「てるくん自身もとても苦労した時期があったようです。」

「てるくんが1年生のときは、学校まで自分で行けるかどうか不安がっていたので、私が毎日学校まで付き添ったんです。それが2年生の半ばまで続いて、それが2年生の後半から1人で行くようになったんですけど、それも本人にとっては多分不安だったんだと思うんですけど、それで3年生になって学校に行きたくない、ってなりました。毎朝、家を出る前に15分くらいは行ってきたくない、って行きたくない、って言って、とにかく学校に行きたがらなくて。なんとか学校に行けても今度はなかなか校舎に入らなくて、特別支援教室の玄関から学校に入ったことも何回かありましたね。それでも、唯一、高学年の子が「自分研究」の発表をしているのを見て、俺もこれやりたい。5・6年生しかやってないみたいだから早く高学年になりたい」ということはずっと言っていました。」

「自分研究をやりはじめてから、てるくんはどのような様子になりましたか。」

「お母さんとしてもこれまで色々なことを感じてこれらだと思いましたが、今振り返ってみてどうですか。」

「去年、他の学校の特別支援教室を利用する1年生の子のお母さんが「うちの子これです。本当に大丈夫かしら」とってとても不安がっていたんですけど、それを聞いて、私も同じように思っていたことをぶっと思いついて、1年生の頃は、授業中に椅子をずっとガタガタガタガタ揺らしていた子が、今、4年生になってきちんと座って先生の話を聞いて、しかもみんなの前で堂々と発表できるように。あと、「わー」ってなってしまう下級生を落ち着かせたりしている姿を見て、本当にここに通わせて良かったなと思って思いました。ですから、そのお母さんに「大丈夫。きっと変わるから」と伝えてあげたいなと思います。」

仲間がいるから頑張れる

「てるくん」

「てるくんはいつから特別支援教室に通っていますか。」

「1年生のときから通っています。今は、火曜の1・3時間目と、金曜の4時間目に来ています。」

「特別支援教室ではどのようなことをしていますか。」

「チーム授業とか個別とか色々あるんですけど、前やったことの振り返りをしたり、トランプとかを使って運動したりします。あと、悩んでいることを先生に相談したりもできるので、楽しみなが勉強しています。それと、自分研究をしています。」

「自分研究はどのようなものですか。」

「自分研究は、自分の苦手なこととかを研究するものなんですけど、まずみんなと一緒に困っていることを話し合ったり、それを分析して、調べていきます。僕の場合は、しゃべりすぎた時にあられる、授業中などいろいろな場面であられる、身体するとペラペラオシャドラーゴンになる、困ったやつ。」

「特別支援教室に通っていて、てるくんの中で何か変わったところはありますか。」

「友達の良いところが気になります。クラスでは知ることができなかった意外な良い一面を発見した後は、その友達と何かあったり、まあ次から気を付けてくれればいかにという気持ちになって、許してあげられることが増えました。前より落ち着いていられるようになった気がします。」

「てるくんの将来の夢は何ですか。」

「もうすぐ6年生です。」

「先生からは、卒業しても来れる日は来たいよ、って言われています。だから中学生になっても、もし新しい発見とかがあったら、後輩のみんなのために来るつもりです。」

インタビューの全文は、教育委員会ホームページでご覧いただけます。



子どものきもち、分かってあげられていますか。

みなさんのまわりに、このようなことに困っている子はいませんか。誰にも言わないけれど、その子は心の中でこう思っているかもしれません。

「ずっと言えなかったコト」は、特別支援教室の子どもの実話をもとにしています。他のエピソードは、動画(Youtube)でご覧いただけます。



<p>子どものきもちシリーズ</p> <p>ずっと言えなかったコト</p> <p>書けない編</p> <p>(作:みわこ先生 監修:特別支援教室の子どもの実話 イラスト:たなべたく)</p>	<p>先生、ほくさ……</p>	<p>黒板 うつすのが、すごくおそいんだ。</p> <p>ノートに書ききれない。</p> <p>先生の話を聞いていると間に合わないんだ。</p>	<p>気づいたら休み時間で、黒板係に消されちゃったこともある。</p> <p>書いてないのはほくさだけ。</p>
<p>そんなふうにしてたんだね。ちょっとお話ししてみようか。</p> <p>先生はいつもこう言います。</p> <p>書くことが苦手なんだね。</p> <p>じゃあ、こーくんの得意なことは?</p>	<p>ほくさ、ほくさかな?</p>	<p>書くのって、ものすごく疲れるんだ。</p> <p>ほんと、やる気なくなるよ。</p> <p>みんながあたりにできていることがほくにはできない。</p>	<p>急いで書くと自分の字がよめない。</p> <p>自分でもきちんと書きたいよ!でも、できない。</p> <p>すごく、つらい。</p>
<p>理科、実験、大好き!宇宙や科学のことって楽しいもん!</p> <p>そうだね。科学のこと、先生より詳しいよね。</p> <p>他には?</p> <p>あとPCも得意だよ。パソコン教室に通ってるんだ。</p>	<p>そうなんだね。じゃあ、一緒に作戦を考えてみよう。たとえば、PCやiPadを使ってみるの、どうかな?</p> <p>そういうこと、している人いるの?</p>	<p>うん、いるよ。iPadで写真を撮ってノートに写したりしてる子。</p> <p>iPadやPCをノートの代わりに使ってる子。</p> <p>それって、ズルじゃない?</p>	<p>クラスでメガネかけてる人いるでしょ?それってズルかな?ズルじゃないよ。必要だもん。そうだね。iPadもメガネと同じ。必要だから使うんだよね。まずは、担任の先生に相談してみようよ。みんなと一緒に考えていこう。</p>



①個別学習の時間。集中して取り組む ②「ペラペラノドン」苦手なことを自分から切り離し、キャラクター化して分析する ③てるくん。みんなのムードメーカー



①個別学習の時間。集中して取り組む ②「ペラペラノドン」苦手なことを自分から切り離し、キャラクター化して分析する ③てるくん。みんなのムードメーカー

●特別支援教室とは？

通常学級の学習や生活におおむね参加できるものの、集団参加に困難さを示したり、学習の一部に「つまづき」があったりする子どもに対し、個別指導や小集団指導（コミュニケーション、運動）など、それぞれの子どもに応じた支援をしています。例えば字を読むのが苦手、静かに話を聞くのが苦手、ことばで上手に伝えられないなど困っていることがあるとき、特別支援教室へ通うことで、自分に合った学び方を知り、スモールステップで取り組むことができます。また、同じ悩みや困りごとを抱える仲間と出会い、困ったことが起きても対応する力を身につけることで、子どもたちが笑顔になれる教室です。

●連携に力を入れ、チームで支援します

特別支援教室では保護者、在籍学級の担任、特別支援教室の担任が連携して子どもを支援しています。連絡ノートを三者で記入し、毎週の子どもの様子を共有し、多くの目で子どもたちをサポートします。



特別支援教室「ひまわり」(三小六小) 森村美和子先生にうかがいました

●子どもたちとの向き合い方

つい苦手なことに目が向きがちですが、子どものよさや得意なこと好きなことを大切に、強みを生かす指導を心がけています。また、目の前の困りごとだけでなく、将来を見据え、今何をすべきかをチームで考え支援していきます。感覚や感性が豊かな分、繊細で傷つきやすく自分だけがダメなのかなと感じている子どもたちに出会います。言葉でうまく表せないという理解されにくく、本人もつらいので、まずは自分の思いを表現できることを大切にしています。話しても大丈夫だという安心で安全な場があること、きもちカード等の視覚的な教材の活用等、本人の

やりやすい方法で、話せるようになり、自分の気持ちを言語化できると感情のコントロールもしやすくなるがあります。



きもちカード

●子どもたちのコメントより

「自分ペースで学べるから楽しい」「仲間がいるから頑張れる！」「扉の向こうは別世界と思わずに、扉をたいてみてください」「特別支援教室は、自分の居場所であり、修行の場でもある」

●森村先生からのメッセージ

特別支援の担任は、子どもにとってよき通訳者であり、よき伴走者でありたいと思っています。本人をとりまく環境を整えたり、本来の力を引き出すお手伝いをしていると考えています。苦手なことや困っていること、好きなこと、得意なことなど含めトータルで自分を好きになってほしいですね。豊かな感性をもった子どもたちに魅力を感じ、子どもたちの可能性を信じています。日々子どもたちから多くのことを学んでいます。

特別支援教室の学習 ～自立活動～

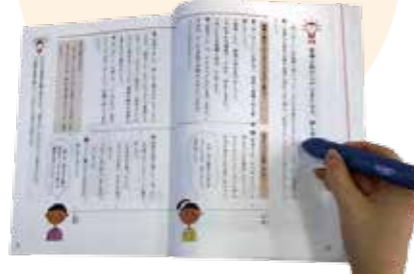


ソーシャルスキルの学習を中心に、人と上手にかかわる方法を仲間と共に活動しながら学び、自己理解を深めます。

小集団でのコミュニケーションの指導

音声付き教科書と読み上げペン

ペン先で紙面をタッチすると、音声再生されます。見た目はみんなと同じ教科書で、線を引いたり、書き込んだりできます。



パーティションで区切った個別スペースで自分の学習方法や目的を相談して決め、自分のペースで理解していきます。

個別での指導

ICT 機器

i Padにアプリをダウンロードして教科書や図書を音声で聞いたり、プレゼンテーションをつくるなどICT機器を活用した子どもにあった指導が行われています。



子どもたちは仲間とともに苦手なことにも挑戦し、自信をつけ、在籍学級に戻ります。

運動指導



トランポリンやバランスボール、ゲームを取り入れた運動で、学習に集中できる体や心をつくりまします。

道具の工夫～椅子～

自分に合った道具や教材の工夫や環境調整も一緒に相談します。この椅子で身体を安定させることにより、活動や学習の意欲を高める助けとなります。



相談窓口

各校または市役所、教育相談所にご相談ください

さまざまな教育の場を紹介しながら、子どもがもっている力を伸ばすためにはどのような環境や学習が必要なのかを、子どもの状態に応じて、保護者とともに考え、より適した就学先を相談します。お気軽にご相談ください。詳細はホームページでもご覧になれます。

拍江市教育委員会 就学相談担当
03(3430)1328

拍江市教育研究所 教育相談
03(3430)6655



■特別支援教室

小学校						
学校名	一 小	三 小	五 小	六 小	和 泉 小	緑 野 小
教室名	けやき教室	ひまわり教室	ふたば教室	ひまわり教室	けやき教室	ふたば教室

中学校				
学校名	一 中	二 中	三 中	四 中
教室名	くすのき教室	くすのき教室	くすのき教室	くすのき教室

■固定学級

学校名	小学校			中学校	
	一 小	三 小	緑 野 小	一 中	二 中
学級名	いずみ学級 (知的障がい)	あおば学級 (自閉症・情緒障がい)	えのき学級 (知的障がい)	1 組 (知的障がい)	2組(休級中) (自閉症・情緒障がい)
学区域	一・三・六小・※和泉小 ※和泉2丁目・3丁目・4丁目 11～23番・5丁目1～16番 元和泉2丁目・3丁目、東和泉4丁目	市内全域 ★平成30年4月に オープンします	五小・緑野小・※和泉小 ※和泉1丁目・2丁目、中 和泉4丁目24～25番・5丁 目17～43番	市内全域	市内全域

『チーム学校』で、子どもや家族をトータルサポート(六小のケース)

週に1回の校内委員会で、その子にとってどのような支援が必要か、具体的な支援方法を検討します。学校の構成メンバーは、校長や特別支援教育コーディネーター、専門教育相談員、特別支援教室担任です。他にも特別支援教室専門員、スクールカウンセラー、言語聴覚士など専門家が参加し、情報を共有することで、ベストな支援方法を考えます。子どもだけでなく、家族のサポート方法も検討します。



日々の子どもの様子や保護者との連絡を行い、校内委員会でどの支援が必要か適切に判断できるようにしています。子どもは日々いろいろな表情を見せるので、必要なことに早く気づきスピーディーに連携し対応できるように心がけています。



拍江市教育研究所を拠点とし、専門教育相談員として、拍江第六小学校には週に2回訪問し心理相談を行っています。行動観察や発達検査の結果を分析し、子どもの支援につなげています。

多様性理解 ～みんな違っていいんだよ～

小学校の学級活動で、「自分のことを知る」「友達のことを知る」時間を設けています。「みんな違っていいんだよ」「一人ひとりが大切な存在」「だから、お互いにあたたかく接したいね」というメッセージが込められた時間で。



よし、自分研究をやろう。—仲間と語る自分—

誰しも「好きなこと」「得意なこと」「困ったこと」「苦手なこと」、様々な経験がありますよね。そして、困ったことや苦手なことを「いつものことだから」「どうせ自分なんて」と、できない自分を責めたり、諦めてしまったことはありませんか。

実は、そんなときにしか考えられないこともあるんです。

自分研究では、できない自分を、責めたり諦める必要はありません。それらの経験やその時の気持ちを自分研究の対象とし、振り返ったり友達と語り合ったりします。自分は「自分」、困っていることは「困っていること」と切り分けて、

「**困っていること**」だけを別のものとして考えることがまず一歩。「困っていること」が出てきたら

それについて、家族と、ママ友と、身近な人と語りあってみます。あるある話や周りの人の考えの話をしているうちに、「困っていること」とうまく付き合う方法がみえてくるはずですよ。

みなさんも自分の研究にトライしてみませんか。

ステップ1 自分の中で「困ったこと」「できなかったこと」を考える

ステップ2 「困ったこと」などを仲間と語る

ステップ3 「困ったこと」などに対して対処法を挙げてみる

自分研究ってなに？ ～自己理解の重要性～

東京大学先端科学技術研究センター
熊谷准教授に聞きました。

自分に合った生き方を選んだり、自分が生きやすい環境を作るには、自分の個性や適性、興味など自分自身を知ることがまず大切です。また自分自身を知るとは、「自分の存在」が、かけがえのないものであることを知ることに繋がります。

「なぜだか知らないけど周りの人と違う...」という環境が続くと、「努力不足なのかな、性格に問題があるのかな」と自分を責め、周囲を気にし、その環境に適応するために自分を押し殺してしまいます。

また、「あの時こうしていれば（こうしてくれていれば）～もっと違ったのではないか」と、取り返しのつかない過去をめぐり、ぐるぐるとした思考にとらわれます。

その結果、自分を否定的に考えてしまい、自分を責め続けてしまいます。

自分研究を通じた自己理解を根気強く続けることで、このぐるぐるとした思考に歯止めをかけてくれるかもしれません。

自己理解を深めていくことで、個人の様々な能力が伸びることも期待できますが、自己理解を深めることで得られる一番大きなことは、「それぞれが「自分」を知り、知り合うことで、互いの違う部分と同じ部分の両方を認め、共に支えあう関係が生まれる」ということです。

では自分を理解するということはどういうことか。自分を考えるとき、みなさんが考える自分というものには、少なくとも二つの要素があります。

一つ目は足が速い、怒りっぽいなどその人の特徴となる、

身体的・心理的な自分です。これを「**パターン**」と呼ぶことにしましょう。

二つ目は生まれたときから続く自分年表のような**歴史的な自分**で「**ストーリー**」と呼ぶことにします。

この二つの要素をそれぞれ整理することで自己理解が深まります。

また、整理するときは、自分の中での整理はもちろんですが、信頼できる周囲の人と話し合うことも大事なことでと考えられています。周囲の人から色々な意見を聞き、自分でも考えることで、今までの自分とは違った視点を持つことができるようになるのです。

二つの要素（パターンとストーリー）をバランスよく研究することが非常に大切

物語（ストーリー）には必ず主人公がいますが、物語が進むにはその主人公の設定（パターン）が必要になります。

逆に、パターンはストーリーの中からしか抽出されません。パターンとストーリーは、鶏と卵の関係にあるので、どちらか一方だけを研究するわけではないのです。

このように自己理解とは、苦手なこと・困っていることを避けるのではなく、仲間と分かち合うことを通じて、かけがえのない自分のことを整理し、自分とうまく付き合っていく方法を考えていこうという取り組みです。つまり、**失敗すらも自分研究の対象になります。**

大事なことは、自分の理想どおりにいかないときに、自分や他人を責めるのではなく、**理想どおりにいかない現実**に好奇心を持ち、**私やあなたを「変えようとする相手ではなく、知りたい相手」と考えること**なのです。

では整理の流れについて例を挙げてご紹介します。

① 身体的・心理的な自分（パターン）

ステップ1 周囲の人が気にならないような音でも気になって集中できない。

ステップ2 自分だけ壁からの反響音に敏感だと気付く。

ステップ3 ストレスを減らすためにノイズキャンセリングのヘッドフォンを付ける。

⇒今まで気づいていなかった他人との違い（ここでは壁からの反響音に敏感ということ）を、仲間と語り合うことで発見し、整理することができ、困っていることとよく付き合う（ヘッドフォンを付ける）ことができるようになります。

② 歴史的な自分（ストーリー）

ステップ1 心に引っかかっている過去の出来事を語る。（トラウマなど）

ステップ2 似た経験をした人とあるある話をする。

ステップ3 話したことで安心感が得られると同時に、意味のある経験の記憶となってトラウマではなくなる。

⇒周りの人と共有できないつらかった経験は、思い出したくないのに当時と同じ鮮明さで勝手に思い出されるトラウマ記憶となり、日常生活の邪魔をします。

しかし、似た経験をしたことある人と話（あるある話）をして共有することで、自分だけではないという安心感を得られ、思い出すタイミングを自分でコントロールできる通常の記憶になっていきます。

このように、ストーリーが整理されることは生きやすさに繋がり、さらには、他者の気持ちを理解することや、未来の展望を具体的に描くこと、現実とは異なる理想の世界を構想する想像力・創造力にも繋がります。